

【 11 】

氏名 安 藤 正 瑛
あん どう しょう えい
 学位の種類 文 学 博 士
 学位記番号 論 文 博 第 47 号
 学位授与の日付 昭 和 44 年 9 月 24 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 **ZEN AND AMERICAN TRANSCENDENTALISM**
—AN INVESTIGATION OF ONE'S SELF
 (禪とアメリカ超絶主義)

論文調査委員 (主 査)
 教授 菅 泰 男 教授 武内義範 教授 御興員 三

論 文 内 容 の 要 旨

禪とアメリカ超絶主義は、それぞれの発生地と文化的背景を全く異にしているけれども、自己自身の可能性の実現の道として、ともにあらゆる外的伝統、権威、制度、形式から離れて、自己自身の内に真理の泉を見出そうとする共通の行道的特色を持っている。本論文は、そのような観点に立って、両者の内容の異同を比較研究せんとしたものである。

第一章は、まず禪の歴史的展開について述べ、大乘仏教の自力的傾向の著しいものとしてこれを位置づけ、つぎに禪の本質に言及せんとして特に次の如くに言う。

禪には人間における「二つの自己」——意識的自己という、不断に変化する、死すべき自己と、この意識的自己の底にその素顔を示している不生不滅の仏性・本心と呼ばれる真の自己——という基本的な考えがあるが、この本心は無形、無相でありながら、意識的自己の内容のみならず、意識的自己の外なる世界の一切の動きや変化をうつしているが故に、屢々鏡に譬えられる。それは意識的自己と一体でありながら、不滅なるが故に本質的には意識的自己とは離れていて、自由であり、従って空間的には宇宙大であり、時間的には過去・現在・未来を包んで永遠である。それは一切のものを真実あるがままにうつし、自己自身を舵とするものとして、真・善・美の価値実現の永遠の根拠であり、源泉でもある。人間における「二つの自己」の中の、この、不滅の、真の自己を自覚的に把握して、自己自身の可能性の完き実現を成就せんとすることこそ、禪の究極目標に他ならない。

第二章は、アメリカ超絶主義の本質をさぐろうとして、まずそれが19世紀ニュー・イングランドに開花するまでの歴史的展開について述べる。

ニュー・イングランドは、17世紀の初頭、この地に信教の自由を求めて移住した清教徒達によって開拓されはじめたが、彼等の宗教思想の内容は、要するに、カルヴィンのそれであった。カルヴィンの思想と云えば、宇宙には人間の救済を一方的に一手に握っている全智全能の厳しい神がいますが、原罪を背負って生まれてきた人間は、唯神の子としての基督の言葉を神の言葉として、これを守り、これをふみ行な

い、努め努めて生きていくのみであるという、極めて峻厳な宗教思想であった。しかし開拓事業が進み、人々の関心がより現実的となるにつれて、彼等の思想も従来の神中心の峻厳なものから、人間中心の傾向の著しいユニテリアニズム（唯一神教）という、人間から神への直通の道を示唆する傾向の強い宗教思想に移っていった。しかし、人間中心の合理的宗教思想とも言うべきユニテリアニズムは、畢竟、一種の教養主義とも言うべきものであったから、知性によって支えられ、人間性の深層に訴えるものとは言い難い。これに飽き足らずして、ユニテリアンたちの間に、深く情意の世界に入り、各人の内的生命の底において直接端的に「永遠なるもの」・神につながることを求め、「神において世界を見る」理想主義を強調するものが現われてきたのはむしろ当然であった。これが超絶主義である。

19世紀アメリカ超絶主義達の中で指導者の役割を演じたエマソンまたは人間における「二つの自己」——「内的自己」と「外的自己」——という基本的な考えを打ち出すに到った。エマソンにおける「内的自己」とは、要するに、生活実践を通して最も深く掘り下げられ、純化された意識的自己、換言すれば、深淵に譬えられる意識的自己の底において「永遠の一者」・神を見る、神秘的な純粹直観、純粹意識の立場に立つ自己であった。従って、可視的な自然は神・「大霊」の周辺か、末端と見られ、現象的な多様性の中に「一」なる霊的統一者が直観される立場に立つ自己であった。

エマソンの超絶主義の世界は、「神において世界を見る」宗教的世界であったが、それは道徳的世界を究め尽して、これを内に包むのみならず、芸術的世界をも併わせ享受しうる世界であった。エマソンと同様に「神において世界を見る」傾向を著しく表わしているホイットマンの世界は、実践的徹底の裏付けを持たない芸術的観照の世界であった。ホイットマンは、しばしエマソンと共通な自他一如・主客合一の純粹直感の審美的世界に遊ぶことが出来たのであるが、この境地を不断に持ち続けることはできなかった。蓋し芸術的世界とは、畢竟、部分的体験における宗教的立場であり、芸術的世界が宗教的世界にまで深まり、純化される為には必然的に道徳的世界を究め、且つこれを越えて包まなければならないからである。これに対して、エマソンの所説を身をもって真剣に実践し、遂にウォルデンの池のほとりでその真髓を体得したソーローこそは、真に「エマソンの嫡子」の名にふさわしい、代表的な超絶主義者であったと言ふべきであろう。

第三章は、アメリカ超絶主義と禅との比較を試みる。人間における「二つの自己」という基本的な考えを共有するアメリカ超絶主義の立場と禅の立場との間には、換言すれば、アメリカ超絶主義において真の自己とみなされている「内的自己」と、禅において真の自己とみなされている仏性・本心との間には、どのような異同が存するであろうか——

エマソンの言うところの「内的自己」とは、畢竟、永遠なるもの、無限なるものにも触れるほどに深く、純粹なものではあるが、しかもなお自己自身は意識的自己という個性の粹の中にある立場、換言すれば、意識的自己の底において、意識を越えた、万物に共通な「永遠の一者」（エマソン「大霊論」）・「我等の生命の永遠の源」（ソーロー『ウォルデン・森の生活』）に触れ、且つこれを仰望する立場に立つ自己に他ならない。

しかし、この立場に停住する限りは、意識的自己の底に容易に離れがたく絡みついた我執の残滓の故に、我等の意識は、外界からの影響によっては時として波立ち、曇り、そのため我等は一切のものを真実ある

がままに見ることができなくなり、真に自由になりきれないこともあることは、エマソンやソーローが卒直に日記の中に度々告白しているところである。従って、アメリカ超絶主義における「内的自己」も、自己自身の可能性の顕現の道としては、遂にその究極地を示すものではないことは明らかである。純粹意識・純粹直観の「内的自己」は、禅においては「清霄裡」とか、「明白裏」とか、「一色辺」とか言われる立場にあたるものであって、心の完き自由と寂静を約束する本心の自覚的握把に究極する禅の立場から見れば、未だ道半ばにあるものと言わなければならない。従って、かかる究極地に体参するためには、我等は「内的自己」の境涯にも停住することなく、意識的自己の底を衝いて、我執の残滓を断除し、意識的自己の底をつき破って、自己自身を個性の枠から大宇宙の中へ解放しなければならない。かくしてはじめて、意識的自己の底にあった本心の鏡が、実は大宇宙に遍満して萬象森羅を支え、照らしている一大円鏡光であることが自覚される。この意味において、自己自身の可能性の全き実現と言う禅の究極目標から見れば、アメリカ超絶主義の立場は、禅のそれへの半途にあるものと言うべきであろう。

論文審査の結果の要旨

Ralph Waldo Emerson が若い頃から東洋古代の思想、ことにインドの古典の影響を受けたことはよく知られている。それが19世紀アメリカ超絶主義の中核をなす部分に作用したことはたしかである。が、Emerson が禅について知っていたとは思われず、禅とアメリカの超絶主義とは直接の関係は考えられない。しかし、そのいずれもが、本質において、外的権威を認めず、制度・形式にこだわらず、自力によって自己の内奥にひそむものをつかみ、個を尊んでしかも個を越える普遍に至ろうとする根本態度において、また発想法や論理の展開において、相似するものがあることは興味ある点である。

本論文の著者は、両者の本質的な相似に着目して、その異同の比較研究を行なおうとする。

第一章は禅の歴史と本質を説く。そこには格別新しい所見はないが、ただ随処に Pascal, Robert Browning, Emerson, Thoreau, Hawthorne, Emily Dickinson, J. D. Salinger などの所説や作品の一節を引用して、禅の普遍的な解説を志し、それが一応の成功を取めていることが、英文で書かれたこの論文の特色である。

第二章において著者は、ニュー・イングランドの清教主義が次第に力を失って、18世紀末からユニテリアン派の教義 (Unitarianism) が行なわれ、更にそれに満足しなかった者のうちに超絶主義 (Transcendentalism) と呼ばれる思想が起こったことを述べ、その中心的人物である Emerson の思想の根底が、Plato流のIdealismでありながら、Mysticismの特色が濃く、同時にまたアメリカ的な現実主義の色彩があり、Pragmatismの先駆をなすものであることを述べる。そして、Emerson の影響を受けた人のうち、詩人Whitman にはむしろその Emerson との相違が目立つのに反して、Thoreau は Emerson の真意義を体して更にこれを深化せしめた者であると説く。以上はおおむね妥当な所見である。

著者は、「自己の心の底に神を見」「神において世界を見る」超絶主義に、二重の「自己」の見方があることを指摘する。すなわち、「自己」には表面的なegoがあると同時に、また、神に通ずる霊が内在する、とする。それは、1883年の説教以来、Emerson が outer self と inner self, conscious self と essential self, understanding と soul, inharmonious and trivial particulars と musical perfectionなどの言

葉で強調して来たところである。この後者がすなわ “the eternal One” とか “the perennial source of our life” と呼ばれるところであり、つまり Emerson の根本点である、“Over-soul” に他ならない。すなわち、「自己」に表層の自我と、宇宙の全霊に合致する魂との二重性を見るのであるが、著者は、これが禅における「我」と「仏性」とに一致すると説く。そうして、その異同を点検して、アメリカ超絶主義における「内的自己」への到達は、禅における悟りの途上にあるものであって、禅においては更に百尺竿頭一步を進めることが求められると説く。

この論文は、むしろ禅の立場からアメリカ超絶主義を批判したものであり、そういうものとしては真摯な労作で、独特の価値をもつものである。ただ、比較研究としては、その用意において、その深みにおいて、必ずしも十全とは言えないものがあるかもしれない。たとえば、東洋古代思想と Emerson との関係はもっとくわしく論ぜられるべきであろうし、また著者も触れているところではあるが、Emerson の Idealism が Plato よりは Plotinus に近いことが Mysticism との関連において更に十分に論ぜられたならば、東洋思想との関連が更に問題になったかもしれない。そのように更に望むべきところはあるが、しかし、このままでもアメリカ超絶主義にいわば新しい照射を当てたものとしてユニークなものと評価されるべきである。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。